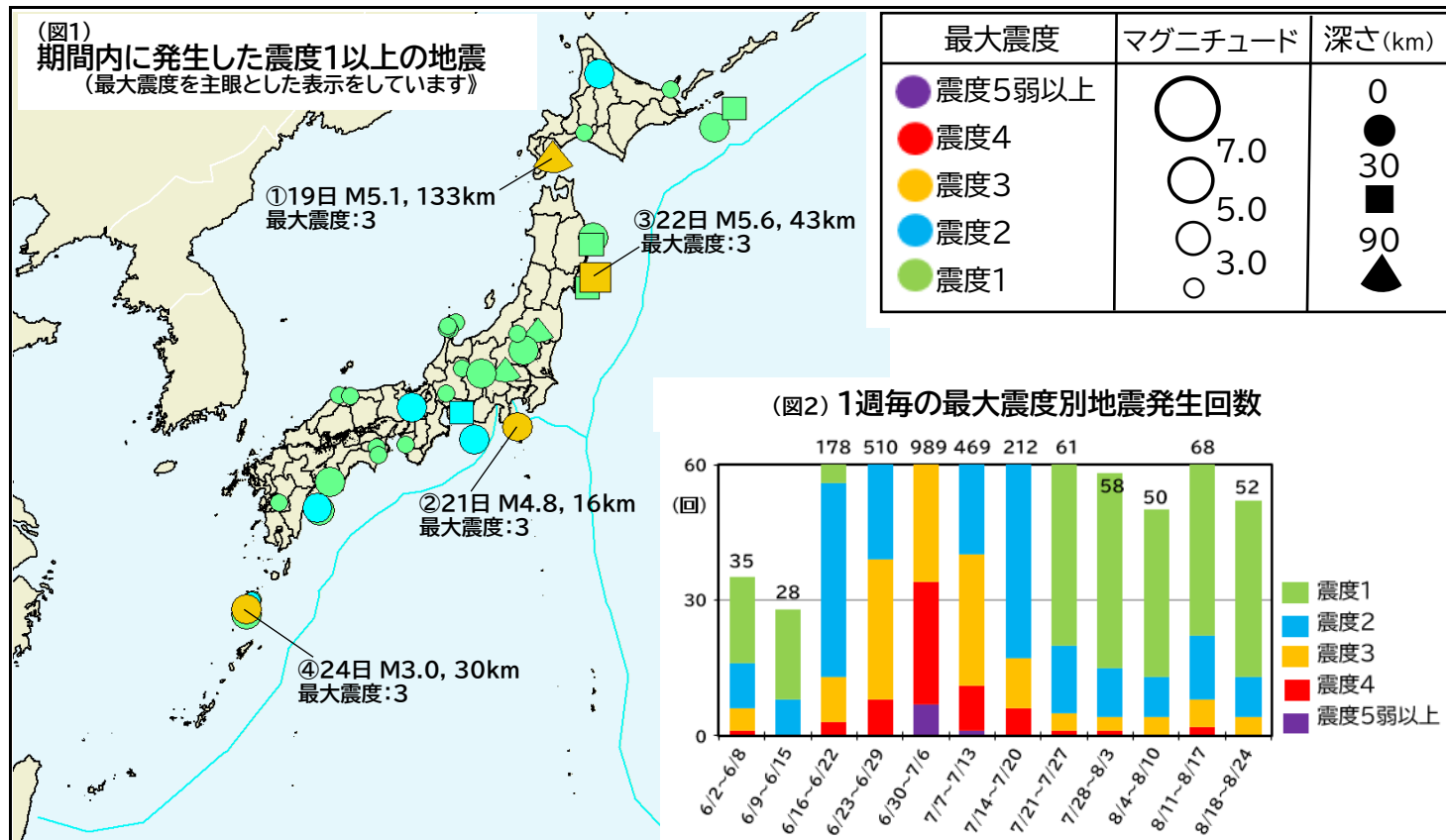


この期間の最大震度は3

本資料は上記期間に国内で発生した震度1以上の地震についてまとめたもの (出典:気象庁震度データベース/地震情報)



主な地震の発生状況 (図1,図2参照)

■ この期間、震度1以上の地震が52回発生。最大震度は3 ■

- ①8月19日07時19分に渡島地方東部で発生した地震(M5.1、深さ133km)により、北海道浦幌町で震度3を観測したほか、北海道から東北地方北部にかけて震度2～1を観測。
- ②8月21日10時44分に新島・神津島近海で発生した地震(M4.8、16km)により、東京都利島村・新島村で震度3を観測したほか、伊豆諸島と関東地方南部で震度2～1を観測。
- ③8月22日07時34分に宮城県沖で発生した地震(M5.6、深さ43km)により、岩手県、宮城県内の複数の地点で震度3を観測したほか、北海道から関東地方にかけて震度2～1を観測。
- ④8月24日01時19分にトカラ列島近海で発生した地震(M3.0、深さ30km:速報値)により、鹿児島県十島村悪石島で震度3を観測。

トピックス

■ 通算300号発行にあたって ■

- ・本、週刊地震ニュースは2019年12月9日に発行を開始して以来、毎週月曜日に一回も休むことなく発行を重ね本号で通算300号を数えました。この間に発生した主な地震を発行者の主観で振り返って見ます。
- ・2019年12月～2025年7月の間に震度1以上を観測した地震は15,485回発生しました。月別の発生回数を示した図3からは、概ね毎月同じような発生数となっていますが、時々、発生数が極端に多い月が見られます。この発生数が多い月はトカラ列島近海の地震および能登半島付近の地震によるものです。
- ・2019年12月～2025年7月の間に震度1以上を観測した地震は、最多の月が1,701回、最小の月が96回で、単純平均は毎月228回でした。
- ・平均値から大きく外れている月もあるので中央値などを加味すると1年間に2,300回程度発生していることになり、平均すると1日あたり6回程度発生していることとなります。
- ・発生した場所は、図4の震央分布図のとおり北海道のオホーツク海沿岸部など一部の地域を除き国内まんべんなく発生しています。台湾付近や千島列島やサハリン近海で発生した地震によって震度1以上を観測した地震も少なくありません。本年7月30日のカムチャツカ半島沖の地震では最大震度2を観測しました。
- ・図5は、最大震度5弱以上を観測した地震の震央分布図です。このうち、話題となった幾つかの地震について次頁で見えます。

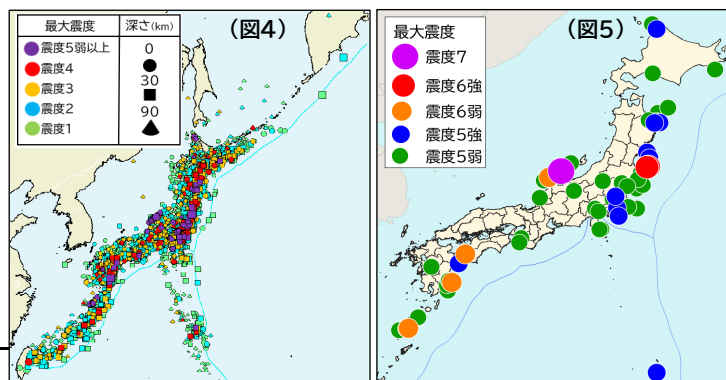
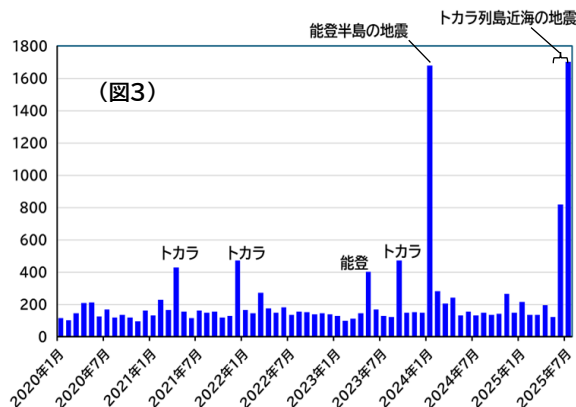
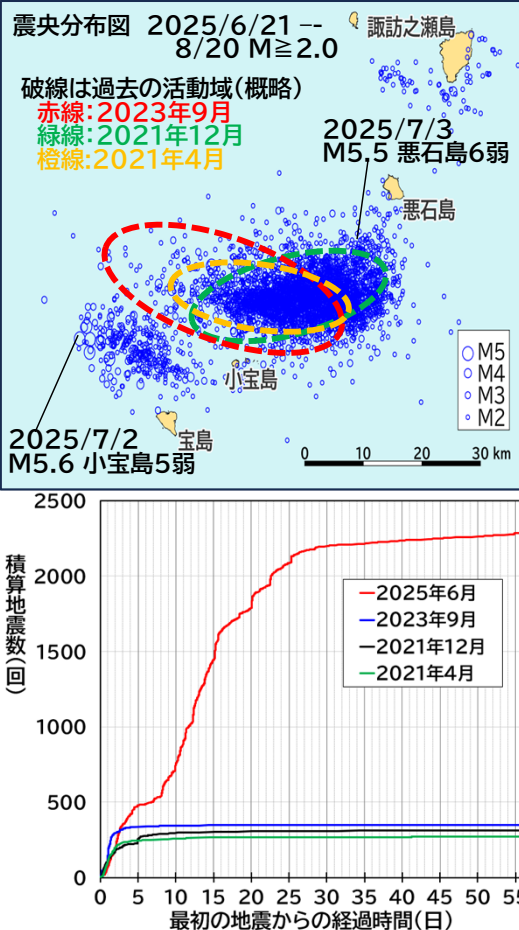


図3:月ごとの震度1以上を観測した地震数 2020/1---2025/7
図4:震度1以上を観測した地震 2020/1 --- 2025/7
図5:震度5弱以上を観測した地震 2020/1 --- 2025/7

島と島が離れるような地殻変動

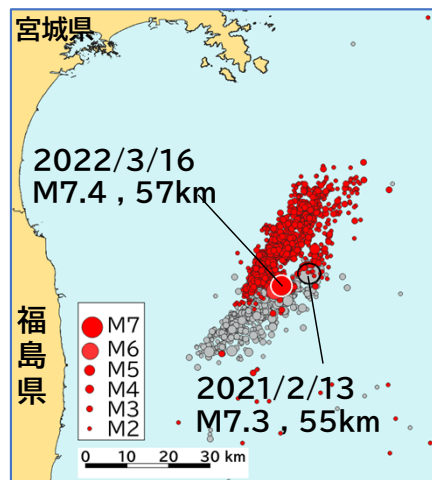
- ・トカラ列島近海(悪石島～宝島にかけての領域)では、2025年6月21日から地震活動が活発になり、7月2日に、この活動域の西端でM5.6の地震が発生し小宝島で最大震度5弱を観測した。
- ・7月3日は、この活動域の東端でM5.5の地震が発生し、悪石島で最大震度6弱を観測した。
- ・この付近では、過去にも活発な地震活動が継続したことがあり、近年では2021年4月、2021年12月、2023年9月などの活動がある(上図)
- ・今回の地震活動は、これらの中で、最も地震回数が多い(下図)。
- ・一連の地震活動に伴って地殻変動が観測されており、かつ、変化の方向が7月2日のM5.6発生前後から変化し、宝島観測点では東北東方向から南方向に変化した。
- また、小宝島でも北東方向から北北西方向に変化したとの報告がある。
- ・この地殻変動の原因として、マグマなどの「流体」が地面を押し広げている可能性などが指摘されていますが、現時点で断定できるものはないようです。



M7超が2年連続 ・福島県沖では、2021年2月13日(M7.3)と2022年

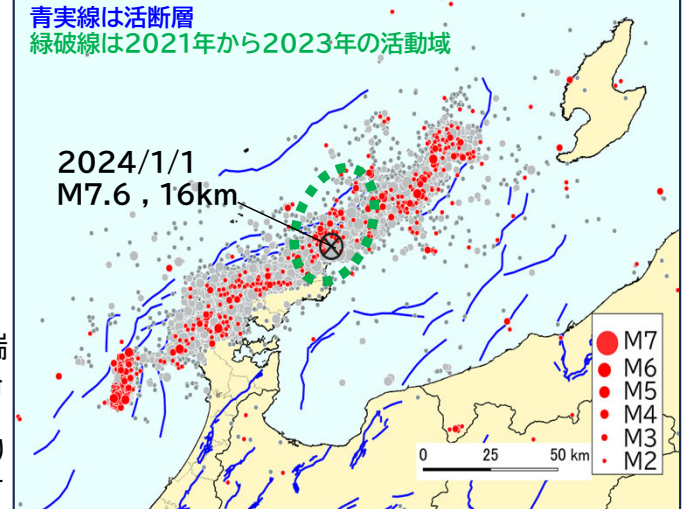
- 3月16日(M7.4)に、共にM7台で最大震度6強の地震が立て続けに発生した。
- ・2021年の地震と2022年の地震の震源は、ごく近傍にある(右図)。
- ・このように短期間のうちに、ほぼ同じ場所でM7を超える地震が発生することは珍しい。
- ・2021年は活動域が南西へ広がり、2022年は、逆方向の北東へ広がっている。
- ・2つの地震は共に、福島県や宮城県で死傷者や家屋全壊などの被害が発生した。(発行者の住宅でも続けて被害発生)

震央分布図(共に3日間の震央を表示)
灰:2021年2月13日からの活動
赤:2022年3月16日からの活動



一瞬にして海が陸に

- ・能登半島北東部では2020年12月から地震活動が活発になり、2021年7月頃から更に活発になっている。この中で、2022年6月19日にM5.4震度6弱、2023年5月5日にはM6.5震度6強などの地震が発生していた。このとき能登半島が隆起する変化が観測されていた。
- ・一連の地震活動や地殻変動の原因は、地下に水などの「流体」が上昇して断層が滑りやすくなるなどして地震活動の活発化につながったと指摘されていた。
- ・2024年1月1日にはM7.6最大震度7が発生した。この地震では、能登半島北側の広い範囲で史上最大級の地盤の隆起が発生した。隆起は約90キロにわたって確認され、約4・4平方キロが海から陸になったとの報告もある。
- ・今回の災害の特徴の一つとして、被災地が半島先端部であり、そこに至る道路が各地で寸断されてしまい、現地になかなかたどり着くことができず、初動対応に時間がかかった。
- ・また、地震や津波などから逃れて助かったものの、その後の避難生活による体調の悪化などが原因で亡くなる災害関連死が直接死の約1.9倍(8月末現在)にのぼった。



震央分布図
灰:2024/1/1 --- 2024/12/31
赤:2025/1/1 --- 2025/8/15
赤で示した最近発生している地震の数は少なくなっているが、まんべんなく発生している

初めての南海トラフ地震臨時情報

- ・2024年8月8日に、南海トラフ地震の想定震源域内となっている日向灘でM7.1、最大震度6弱の地震が発生した。
- ・この地震の発生により南海トラフ地震の想定震源域では、新たな大規模地震の発生可能性が平常時と比べて相対的に高まっているとして評価され、気象庁は同日19時15分に南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)を発表した。南海トラフ地震臨時情報が発表されのは2019年に運用を開始してから初めてとなった。
- ・臨時情報の発表を受けて、高齢者の事前避難、海水浴場の閉鎖、イベントの中止、ホテルのキャンセル、鉄道の運休など生活に大きな影響が出た。
- ・この対応踏まえ、国は臨時情報が発表された際に自治体や事業者が取るべき対応をまとめたガイドラインを2025年8月に見直し公表した。
- ・なお、M7.1発生以降に想定震源域内で活動が高まることはなかった。

